



シャチ全身骨格 国立科学博物館蔵

企画展 令和3年4月10日(土)～5月9日(日)

2 受贈記念 かきたけんじろう 垣田堅二郎コレクション展

近現代版画の魅力——ルオー、クラウヴェ、菅井汲、すがいくみ 深澤幸雄、ふかざわゆきお 李禹煥らを中心に——リ・ウーファン

企画展 令和3年7月17日(土)～8月29日(日)

3 QooDZILLA!! クジラとイルカの世界

- 4 [普及] 新事業紹介 **とっとりデジタルコレクション**
—鳥取県立4館合同のデジタルアーカイブシステムが稼働します—
- 5 [美術] 新収蔵品紹介 **島田元旦《花鳥図押絵貼屏風》**
コラム **みて、感じて、脳を動かして鑑賞**
- 6 [自然] 資料紹介 **ナガエノスギタケ発生環境模型**
- 7 [人文] 資料紹介 **文書筆筭の不思議な穴**
- 8 **「私たちの県民立美術館」の動き、「Pass me!」の発行について**

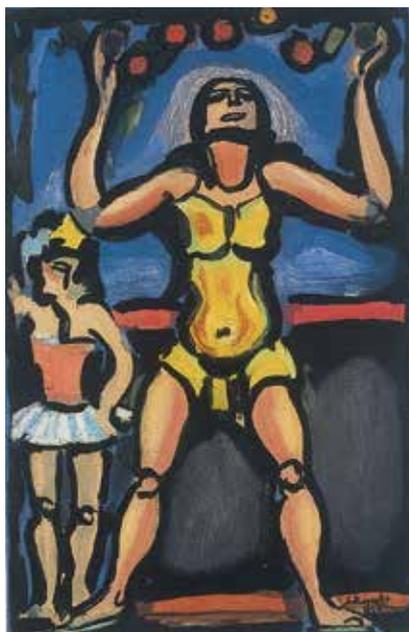
企 画 展

受贈記念 垣田堅二郎コレクション展

近現代版画の魅力——ルオー、クラーク、菅井汲、深澤幸雄、李禹煥を中心に——
令和3年4月10日(土)～5月9日(日)

垣田堅二郎コレクション

鳥取県立博物館では令和元年度、倉吉在住の垣田堅二郎氏より近現代の版画作品を中心に167点の美術作品の寄贈を受けました。このコレクションは菅井汲や宇佐美圭司、李禹煥といった日本を代表する美術家の多くの版画の名品を含み、具象から抽象、表現的な作品から寡黙な作品まで版画という表現の多様性を十分に味わえる質の高い作品によって構成されています。とりわけ日本でも人気のあるジョルジュ・ルオーの版画集「流れる星のサーカス」17点や深澤幸雄による銅版画約30点など、何人かの作家については代表作を網羅した充実した内容を示しています。しかも個人コレクションとは思えない大作が多く、博物館の広い空間に展示しても十分に映える作品揃いです。



ジョルジュ・ルオー 版画集「流れる星のサーカス」より(曲芸師) 1934年

© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 G2434

コレクションの充実へ

これによって県立博物館の美術部門においてこれまで所蔵作品が比較的少なかった近現代版画のジャンルに関して、一挙に作品の厚みが増すこととなります。新しい美術館の開設を見据えて、県立博物館の美術部門では作品の収集方針を広げ、現代美術にもさらに門戸を広げることを予定していますが、今回収蔵した作品はこのような方針とも合致しています。

この寄贈を記念して、県立博物館ではこの春、「受贈記念 垣田堅二郎コレクション展」を開催することとい



深澤幸雄《銀河からの便り》1979年

たしました。この展覧会では今回寄贈を受けた作品を全点展示して、近代から現代にいたる版画表現の多様性と可能性を紹介いたします。

県立美術館の開館に向けて

令和7年春には新しい県立美術館の開館が予定されています。新しい美術館には版画や素描の展示に特化した常設展示室も設けられます。今回の展覧会では新しい美術館においてもコレクションの主要な一角を占めることとなる垣田堅二郎コレクションの全貌を初めて公開し、新しい美術館の建設に向かう気運を盛り上げていきたいと考えます。

(副館長 尾崎 信一郎)

- 休館日：4月の毎週月曜日
- 観覧料：一般：600円(前売・20名様以上の団体／400円)

関連イベント

- 特別講演会「近現代版画入門」
4月24日(土) 午後2時～3時30分
講師：三木哲夫氏(兵庫陶芸美術館館長・版画史研究家)
- 企画展ギャラリートーク
4月10日(土)、17日(土) 各日とも午後2時～3時
- ワークショップ「巨大な版画で、鯉のぼりをつくっちゃおう！」(仮)
5月1日(土) 午後2時～4時30分 定員20名程度
(要申込) 4月16日(金)8時30分～ 電話のみ受付
対象：幼児～一般

QooDZILLA!! クジラとイルカの世界

令和3年7月17日(土)～8月29日(日)

(主催)クジラ展実行委員会



クジラ類は陸上から海中生活へ高度な適応を果たした哺乳類です。大型クジラは巨大恐竜をもしのぐ体サイズをもち、小型クジラ、とくにイルカたちはとても愛くるしいですが、彼らの魅力はそれだけではありません。

本展覧会では、クジラ類の進化や水中生活への適応の様子を概観し、形やくらしの多様性、とくに採餌や繁殖行動といった野生動物としてのなまなましい姿にスポットをあてて紹介します。

ハクジラの食事

クジラ類は「ハクジラ類」と「ヒゲクジラ類」に大きく分けられます。前者は大きめのエサを一匹ずつとらえて食べ、後者は大量の小さなエサを濾しとって食べています。

ハクジラ類の歯は、種類によって数や形に違いがあり、これはエサと深く関係します。ハセイルカには上下合わせて約200本もの歯が並びます(写真1)。彼らのおもな餌は魚で、たくさんの歯はすばやく逃げる魚をがっちり押さえつけます。一方でハナゴンドウは、上顎には歯が全くなく、下顎に数本の歯があるのみです(写真2)。彼らはおもにイカ類を食べ、捕らえる時は歯を使わず吸い込むようにします。海のギャングと呼ばれるシャチは、太く頑丈な歯をしています(表紙写真)。彼らは大型の魚類や海棲哺乳類を襲い、肉をかじりとして食べるのです。



写真1 ハセイルカ骨格標本 鳥取県立博物館蔵



写真2 ハナゴンドウ頭骨標本 太地町立くじらの博物館蔵

奇妙な胃袋

食べたものはおなかの中で消化されます。クジラ類の胃袋は、複数の部屋に分かれた奇妙な形をしています(写真3)。一つ目の部屋は食道が変化したもので、ここでは消化液を出さず、食べたものを物理的に粉碎します。クジラ類はエサを丸呑みするため、胃袋で“咀嚼”しているわけです。そして第二・第三の部屋では消化液を出してじっくりと消化していきます。



写真3 ハンドウイルカの胃袋乾燥標本 国立科学博物館蔵

たたかうクジラ

クジラも恋をし、そのためにたたかいます。例えばオウギハクジラのオスの下顎には大きな1対の歯がありますが、メスにはありません。この歯は、どうやらオス同士でのメスをめぐるたたかいに使われているようです。この種類では生きた個体が観察された事例が少なく、くらしぶりは謎に包まれています。ときおり漂着する個体を観察すると、オスの体には白いすじ状の傷跡がついていることから(写真4)、オス同士が下顎の歯を相手の体につけてたたかっているものと考えられているのです。



写真4 オウギハクジラのオスに見られる体表の傷 2014年3月26日、境港市漂着個体

このように、クジラ類の形やくらしは実に多様です。このほか展覧会では、ヒゲクジラ類のヒゲの多様性やイルカの配偶行動、クジラの体でくらす寄生虫など、さまざまな標本や映像資料を通してクジラたちの私生活を紹介します。そして展示室の壁面いっぱいに表示するシロナガスクジラの実物大高精細写真では、彼らの巨大さを体感していただけます。ぜひご覧いただき、クジラとイルカの世界をお楽しみください。

(学芸課 一澤 圭)

- 休館日：会期中無休
- 観覧料：一般/700円(団体・前売・大学生・70歳以上/500円)

とっとりデジタルコレクション

—鳥取県立4館合同のデジタルアーカイブシステムが稼働します—

デジタルアーカイブって何？

最近耳にする言葉「デジタルアーカイブ」って一体何のことかわかりますか？一般的に「図書・出版物、公文書、美術品・博物品、歴史資料等公共的な知的資産の総デジタル化を進め、インターネット上で電子情報として共有・利用できる仕組み」*の事を指しています。国内各地の図書館や博物館・美術館などが収蔵資料等をデジタルデータ化し、インターネットで公開・活用に取り組んでいます。

鳥取県のデジタルアーカイブ —とっとりデジタルコレクション

実は、当館では平成13年度から収蔵資料のデジタル化を進めており、一部をインターネット上で公開してきました。しかし、近年の通信技術の向上やスマートフォンの普及などにより、システムを改修する必要性が出てきました。時を同じくして、鳥取県立図書館でも収蔵資料のデジタルアーカイブ化の動きがあり、同じような構想を持つ鳥取県立公文書館と鳥取県埋蔵文化財センターも含めた4館合同のデジタルアーカイブシステム「とっとりデジタルコレクション」を構築することになりました(令和7年から鳥取県立美術館も参加)。

こうして、県内4つの施設の収蔵資料データを一つのシステムにまとめることで、大きなメリットが生まれます。

これまで、歴史資料は博物館のほか、図書館や公文書館でも所蔵しており、利用者が見たい資料はそれぞれの館に尋ねる必要がありました。このシステムにより、目録情報や画像、さらに動画や3Dデータまでがインターネット上で一つのWEBページで検索・閲覧できることで、必要な情報に簡単にアクセスできるようになります。

また、今回のシステムの特徴として、共通のテーマをもとに各館所蔵のデータを集めた“WEBギャラリー”も公開しています。例えば、“鳥取砂丘”をキーワードに、各館がそれに関係する絵画や古文書、絵はがきなど

のデータをまとめたWEBページを作成しています。こうした共通キーワードのWEBギャラリーを充実させていくことで、利用者が飽きないよう工夫を行います。

さらなる展開へ—デジタルアーカイブの可能性

「とっとりデジタルコレクション」は鳥取県内だけにとどまりません。日本のデジタルアーカイブのつなぎ役となる「Japan Search」や国立国会図書館、国立公文書館のデータベースとも連携し、さらに日本各地のデジタルアーカイブともつながることが可能となります。

令和3年度には、全国の小中学校で児童生徒が1人1台のパソコンやタブレットを持つようになり、様々な教科での調べ学習に活用される機会が多くなると予想されます。当館では、様々な活用の場を提供できるよう収蔵資料のデジタルアーカイブ化に努めていきます。

(学芸課 茶谷 満)

とっとりデジタルコレクション

<https://digital-collection.pref.tottori.lg.jp/>



「とっとりデジタルコレクション」の画面

* 総務省「デジタルアーカイブの構築・連携のためのガイドライン」(2012年3月26日) https://www.soumu.go.jp/main_content/000153595.pdf

しまだ げんたん 《かちょうず おしえ ぼりびょうぶ》
島田元旦 《花鳥図押絵貼屏風》

島田元旦(1778-1840)は、田安家の家臣 谷麓谷家の子として江戸に生まれます。若くして兄 谷文晁の影響を受けながら絵をよくしました。24歳で鳥取藩の重臣 島田図書しまだ ずしよの養子となり、文政12年(1829)、52歳で初めて鳥取へ「帰国」します。

昨年度当館が受贈した《花鳥図押絵貼屏風》は、六曲一雙の各扇せんに絹本着色の四季花鳥を主題とした

12図が貼付けられた作品。款記により天保2年(1831)の春から夏にかけての制作であることが分っています。この年、元旦が国元を離れたという記録はなく、よって本作は鳥取で制作されたものと考えられます。迫真性の高い精緻な描写と、良質な絵具を用いた洗練された彩色が



島田元旦《花鳥図押絵貼屏風(右隻)》天保二年(1831) 六曲一雙 絹本着色 鳥取県立博物館蔵

際立ち、各二扇ずつを対として縦横に展開するモチーフの配置などからは、元旦の堅固な構成力が看取できます。本作は、元旦円熟期における代表作の一つとして位置付けることができるでしょう。

(美術振興課 山田 修平やまだ しゅうへい)

コラム

みて、感じて、脳を動かして鑑賞

「小グループに分けてスタッフの方が一緒に回ってくださったので子どもたちは展示作品について考えることができた」令和2年度に引率で来館された先生の言葉です。「知る」ではなく「考える」ことができたと書いてくださったことがとても嬉しく感じられました。午前中に複数の見学場所をめぐり、お弁当を食べた後の一年生の子どもたち。集中力が途切れても無理もない状況の中、作品を前に「考えて」くれたのです。

鑑賞とは「自分にとっての価値を作り出す行為」だといわれます。作品の価値を理解するのではなく、みることを通じて感じ取り、どうしてそう感じるのかを考え、もう一度みる、その繰り返しの中で鑑賞は深くなっていきます。そして時には、他者と対話することで共感したり、あるいは自分とは異なる感じ方、考え方を認め合ったりする場となるのです。子どもたちは、みて、感じて、脳を動かして鑑賞しています。子どもたちと作品との出会いの場として当館をぜひご活用ください。

(美術館整備課 佐藤 真菜さとう まな)



企画展「ザ・フィンランドデザイン展」会場風景

ナガエノスギタケ発生環境模型



ナガエノスギタケはその名のとおり地中に長い柄を伸ばしたキノコで、その長さは地上部を含めて50cmになることもあります。(写真1)

ナガエノスギタケの柄はなぜ長いのか？その謎は、1976年に京都大学の相良直彦博士(現在、名誉教授)が



写真1 相良博士監修のナガエノスギタケ生育環境模型(自然常設展示室) ナガエノスギタケと土壌は樹脂製、落ち葉は実物の乾燥品、モグラは鳥取産のコウベモグラの剥製。



写真2 ナガエノスギタケの発生場所からモグラの巣の位置を推測して発生原因を調査する相良博士(1995年新潟県内) ナガエノスギタケはコナラの根が伸び、湿り気があり水はけが良い環境を好む。

ナガエノスギタケがモグラの使用済みのトイレ跡から生えていることを、発見したことから解明されていきます。

モグラの巣には地中深くに落ち葉を丸めて敷き詰めた寝室があり、その寝室を囲むようにトイレがつくられます。ナガエノスギタケはそのモグラの使用済みのトイレ跡からコナラなどの樹木の根との間に「菌根」という組織をつくって、栄養分をやりとりする共生関係を構築して生えていたのです。ナガエノスギタケは地上で傘を開いて胞子を飛ばします。そのためには地表に出るだけの長さの柄が必要でした。

ナガエノスギタケは、モグラ類の他、トガリネズミ類やアカネズミ類などのトイレ跡からも発生します。これら哺乳類のトイレ跡、コナラ類などの植物、そしてナガエノスギタケなどのキノコ類、これらの関係を考えると、改めて生きもの同士のつながりの巧妙さや自然界の不思議さを感じずにはいられません。それらの全容解明までには明らかにしないとイケないことがまだまだありそうです。

写真1は、ナガエノスギタケとモグラと樹木の根の関係を相良直彦名誉教授の監修で製作した模型です。この模型は当館の自然展示室でいつでもご覧になれます。

(学芸課 清末 幸久)

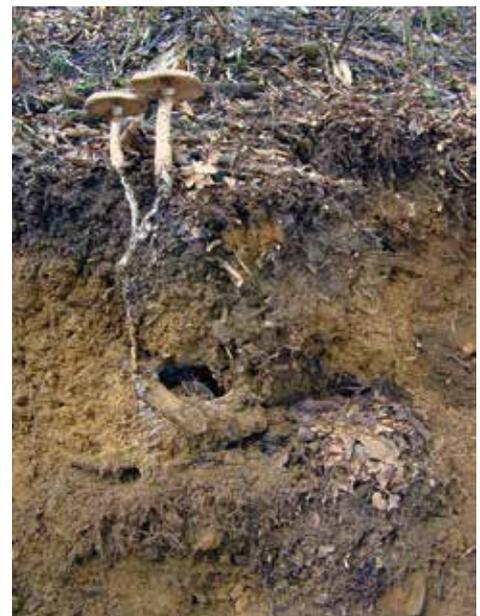


写真3 調査で得られたナガエノスギタケの発生環境の断面。これをもとに模型(写真1)が製作された。

文書筆筒の不思議な穴

写真2
文書筆筒

県立博物館には「藩士家譜」(以下家譜と略す)と呼ばれる鳥取藩士の経歴を記した冊子が残っています。これは鳥取藩が、「士分」と呼ばれる騎乗を許された上層の藩士を対象として、家々の経歴をまとめて提出させたもので、どのような由緒を持つ家なのか、当主が藩でどのような役職を務めたのかといったことが書かれています。藩は、それを藩庫の記録と照合しながら、加筆訂正し、一家ごとに冊子として清書しました。

写真1
藩士家譜「波(は)」の部

8年かかった藩士家譜の作成

家譜は定期的に作成され、享和3年(1803)、文政10年(1827)、明治18年(1885)を内容の下限とする3回分が現存しています。このうち享和期のものは、御日記取調役の笠井小左衛門をチーフとした5名の専門チームが組織され、享和元年に作業が始まり、文化5年まで8年の歳月をかけて約1000冊を2部完成させました。これだけの大部とあって、利用のため全体はいくつかの基準によって分類されています。ひとつは家老、御医師、米子組、江戸定詰のように格式や属性ごとで分類したもの、

もうひとつは苗字による「いろは」別です。

後者の場合、たとえば「波」で始まる苗字の藩士は32家あるので、32冊が「波」の部として帙に一括されています(写真1)。

貴重な文書筆筒

さらにこのとき作成された家譜には、専用の筆筒が新調され、それが現存しています(写真2)。木製の筆筒は、大きさが横幅73.4、高さ53.0、奥行34.8(いずれもcm)ほどで、4段3列と3段3列の2枠で1組となっています。どちらにも両端に鉄の環がつき、担い棒を通して肩に担ぎ、有事に持ち運ぶことができるよう考慮されています。現在は前蓋が欠失していますが、元々は鍵がかけられるようになっており、家譜が厳重に管理されていたことがうかがえます。筆筒は、分類に従って配架できるよう、棚板の側面に分類項目が書きこまれています(写真3)。さらに興味深いのは、棚板をみると真ん中に丸い穴があいており、手前はU字形に切り抜かれている点です(写真4)。これは横積にした冊子が取り出しやすいように、指や手を差し込むための工夫とみられます。実際に家譜が、この筆筒に収納されていた動かぬ証拠は、帙の裏側に棚板の穴と同じ形で残る紙焼け跡です(写真5)。数ある藩の古文書のなかでも、保管していた筆筒が一緒に残っている例はほとんどなく、江戸時代の文書管理の一端を知るうえで、貴重な歴史資料となっています。

(学芸課 来見田 博基)



写真3 「波(は)」と「仁(に)」の棚に収められた家譜



写真4 棚板の穴



写真5 変色した家譜の裏面

「私たちの県立美術館」の動き

県内ミュージアムの連携活発化

～より充実したアート活動に県全域で触れられるように

ここに掲載している写真は、令和2年に行われた「鳥取県ミュージアムネットワーク連携事業 | 鳥取県立博物館・米子市美術館共同企画展 生誕100年記念 杵島隆」の、米子市美術館での展示の様子です。本展では、鳥取と米子の両館が収集してきた多くの収蔵品の中から、両館の担当者が幾度も対話を重ねて杵島隆の写真作品をセレクトし、両館の会場でテーマごとに陳列しました。この事業はつまり、現在までに両館が培ってきた資源、美術作品それ自体に加えて学芸員らが蓄積してきた研究成果を、県内のより広いエリアに還元していく取組の一つと言えます。私たちは令和7年春の県立美術館開館を契機に、県内美術館等の連携を一層活発化させ、アートというものに県全域で親しんでいただける環境を作りたいと



米子での共同企画展の様子(写真提供: 米子市美術館)

考えていますが、本展はそのプロローグなのです。令和3年度の秋には第二弾として、日南町美術館を会場に日本画の共同企画展「木下翠雨の里帰りと同時代を生きた郷土の日本画家たち(仮称)」を計画しています。どうぞご期待ください。

美術館に関する情報は、こちらのホームページをご覧ください。
<https://www.pref.tottori.lg.jp/bijyutsukanseibi/>

(美術振興課 みうら つとむ 三浦 努)

Pass me! パスミー! 絶賛発行中!

「美術館ができるまで」を伝えるフリーペーパー「Pass me!」は、この度、待望の4号目が完成しました! 2019年12月に1号目を発行して以来、おかげさまで、各方面より多くの反響をいただいております!

さてこの表紙には、毎回「白い箱」が登場します。これは、“アート”や“ミュージアム”のメタファー(隠喩)となるもので、アーティストやアートの振興・普及に携わる方がリレーしながら新しい美術館に向かっての歩みを進めていくことをイメージさせるものです。さて次は、誰が、どこで、美術館へのパスを繋いでいくのでしょうか。バックナンバーも含めて通覧すると、県内の各ロケ地を巡るようで面白いかもしれません。ぜひご覧ください。

(美術振興課 やまもと とおる 山本 亮)



『Pass me!』は、当館エントランスや美術館整備局、県内のミュージアム施設、図書館、公共施設等に設置しています。

鳥取県立博物館ニュース No.31

令和3年(2021年)3月26日発行

編集・発行 鳥取県立博物館

住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地

TEL 0857(26)8042(代)

FAX 0857(26)8041

URL <https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/>

E-mail hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp



博物館 HP



- 入館料: 常設展/一般180(150)円
()内は20名様以上の団体料金
- 開館時間: 9時～17時(入館は16時30分まで)。一部、19時(入館は18時30分)まで開館の土曜日あり。詳細はお問い合わせください。
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
年末年始(12月29日～1月3日)
※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



- JR鳥取駅からバスで
- ①100円/バス「くる梨」緑コース「①仁風閣・県立博物館」下車すぐ
- ②ループ麒麟獅子「③鳥取城跡」下車すぐ
- ③砂丘・湖山・賀露方面行「西町」下車、約400m
- ④市内回り岩倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
- JR鳥取駅からタクシーで…約10分
- 鳥取砂丘コナン空港から…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
- お車で…鳥取自動車道・鳥取ICまたは鳥取西ICより約15分
※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場【無料】へ

お客様の満足の笑顔へ…
MORRIX
 株式会社モリックスジャパン
 TEL 0857-23-3641

本社 鳥取市東町2 03-6
 倉吉店 倉吉市下田町東7 0 中津ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

通 日本通運
 NIPPON EXPRESS

鳥取事業所 0857-28-0202